

Title	ぷらっとシネマ 不幸ではあっても地獄ではない『アフリカン・ソルジャー：少女兵士の戦場』（L・ファロルニ監督）
Author(s)	萩原, 弘子
Editor(s)	
Citation	働く女性の情報誌 いこ る. 2010, 23 (2010 春号). p.18
Issue Date	2010
URL	http://hdl.handle.net/10466/15473
Rights	



不幸ではあっても地獄ではない

『アフリカン・ソルジャー:少女兵士の戦場』(L・ファロルニ監督)

アスマラの孤児院で暮らすアウエトを、姉のフレイウェが迎えに来た。アスマラは現在エリトリアの首都となっているが、アウエトがそこで過ごした1970年代当時、まだエチオピアの一都市だった。アスマラでバスに乗った姉妹は、長旅の末に小さな村に着く。数年ぶりに会う父との生活はどかきこちない。エリトリア独立戦争が拡大しつつあった。始まったばかりの村での生活は、父が姉妹をゲリラ部隊に引き渡してあつけなく終わる。そこから解放戦線の子ども兵士として、野営と移動、訓練と戦闘の日々だ。まだ10歳にもならないアウエトが、ゲリラ兵士となっていく。

いまはドイツを中心に歌手、俳優として活躍するセナイト・メハリの驚愕の自伝を映画化した作品だ。1974年、エリトリア人の父、エチオピア人の母のもとに生まれたメハリは、6歳でエリトリア解放軍の兵士となり、3年間を戦場で過ごした。その後スーダンで暮らし、12歳でドイツに移住。2001年に「レーベン(人生)」が大ヒットして、いまや誰もが知る歌姫である。

2008年のベルリン映画祭出品作品なので日本公開を期待したが、レンタル提供のみとなった。1970年代の東アフリカの政情を知らないとわかりにくい部分はある。しかし、私たちの、アフリカへの無知を開いてくれる清新な作品だ。

本作の重要なメッセージはもちろん、子ども兵士をなくしていこうというものだ。世界には30万の子ども兵士がいるという。子どもに武器を持たせ、敵とはいえ人間を殺させることの不正義は訴えなければならぬ。しかし本作は、子どもに銃を持たせるおとなたちを、いたいけな子に人殺しをさせる残虐非道な存在とは描いていない。父娘の気持ちのすれ違いは描いても、戦場に娘ふたりを送る父を冷酷無情な親とは描いていない。子どもに武器を持たせる状況の不幸は否定しようがないとしても、独立のためのゲリラ戦そのものが否定されているわけではない。ましてや、一般論としての戦争反対とか、子どもを大切にといった、正義の形式を整えただけの説教に墮していくことはない。エリトリア独立戦争は避けられない必然の闘いだった。そのことが、アウエトという小さな内部者の視線で、ときに批判も交えながら描かれている点が、子ども兵士問題の困難をより雄弁

に伝えている。

長年の内戦で家族も地域社会も壊れてしまった状況下では、子どもが生きられる数少ない共同体がゲリラ部隊だという現実がある。戦闘組織は、それまでアウエトの知らなかった信頼できるおとなや友人との出会いをもたらせてくれた。野営生活の厳しさはあるが、実現をめざす大義があり、教育も作戦遂行も、それなりの合理的な秩序で行なわれている。軍事組織なので、間違いを犯すと子どもにも処罰が下るが、そんな子もまた受け入れていく寛容さがある。アウエトは教育係のミケーレ、司令官のマアザを父母のように慕い、家族を見つけたと思うようになる。

アウエトの観察眼が批判的になることもある。食料の分配が戦場での活躍によって偏ること、死体となって帰ってきた同志の葬送に戦死の美化という機能があることに、アウエトは気づき、違和感を抱いている。しかし、共同体のルールについては、おとなたちにもいろいろな意見があり、アウエトの見方に賛成してくれる者がいることも描かれている。

戦況が窮してくると、それまで木製銃しか持たせてもらえなかった年少組も前線に駆りだされる。アウエトも、銃弾の込め方や安全装置のはずし方を教えられ、戦場での死体処理も命ぜられる。それでも子どもたちを洗脳された殺人ロボットのように描かない点が、ハリウッド映画で同じく子ども兵士が登場する『ブラッド・ダイヤモンド』(2006)などとは違っている。シエラレオネ内戦下でのダイヤモンド利権をめぐるギャング団の争いを描く同作では、かどわかされて血に飢えた餓鬼となった少年兵が銃を乱射し、平然と仲間を殺す。アフリカは子どもをも鬼に変える阿鼻叫喚の地獄として描かれていた。

1993年、エリトリアは独立したが、長期化した内戦を逃れて難民となったまま、まだ異郷にいる者は多い。メハリ自身、ドイツを定住の地としている。それでも、兵士として過ごしたかつての戦場を、不幸ではあっても、地獄だったとは考えていないのではと、映画を見て思う。地獄と違って、この世の不幸は人がつくりだしたものであり、克服の希望があると、本作は感じさせてくれるのだ。

(2008年、92分、ドイツ、イタリアほか)